

連載 “Well-being” ことをはじめ

第 64 回 公開研究会「『超デジタル世界：DX、メタバースのゆくえ』をめぐって」に参加して

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ
三村 和子

西垣通先生による新刊出版を記念して、ネオ・サイバネティクス研究会と当学会基礎情報学研究会による合同公開研究会「『超デジタル世界：DX、メタバースのゆくえ』をめぐって」が 2 月 25 日に開催され、西垣先生が登壇されました。新刊に取り上げられたオギュスタン・ベルク氏による「言葉の露点」の論考は、今年 1 月 9 日に逝去された芳賀正憲さんがその意義に着眼し、情報システム学会に紹介されたことが発端であることから、芳賀正憲さん追悼の時間が持たれました。芳賀さんから指導いただいた者の一人として、私から芳賀さんの情報システム学会における貢献や「言葉の露点」についての思いについて述べさせていただきました。IS 技術者のための Psytech2020 研究会の成果である「俳句における言葉の露点と景色」の邦訳発表から約 1 年が経過し、新刊出版をきっかけに「言葉の露点」について改めて考えるよい機会となりました。今月は公開研究会に参加してこれから研究会として取り組む方向性について検討します。

「言葉の露点」については、芳賀さんが 2005 年 5 月 14 日に和敬塾で行われたベルク氏の講演会「言葉の露点」に出席して、「言葉の露点」の考え方は情報システムに適用できると発想したことが発端です。そして情報システム学会に紹介され、「新情報システム学序説：人間中心の情報システムを目指して！」に概念化モデルが表されました。講演から数年の時間が経っていたためか、情報源であるベルク氏の講演録が和敬塾 web サイトで参照できなくなりました。

私は芳賀さんからのご教示で「言葉の露点」について知りました。そして、ベルク氏がどのような文脈で発想された概念なのかとても興味を持ち、「言葉の露点」に関する文献調査を始めました。和敬塾でのベルク氏講演の翌年に発表された仏語論文“Point de parole et paysage dans le haiku（俳句における言葉の露点と景色）”をすぐに見つけることができ、翻訳者を探すことにしました。この論文は、風土学、哲学、日本文学という複数の分野にまたがる内容であることから翻訳のハードルが高かったのでしょう、引き受けてくれる翻訳者の奥田康子さんに出会うまでに時間がかかりましたが、ついに昨年邦訳を発表することができました。

公開研究会で西垣先生が指摘されたことですが、日本人にとっての文化とは自分を（周囲に）溶け込ませる、失くしてしまう文化であるということです。意識が溶け込んでいく文化であるため、人と人との間には暗黙の了解が前提とされ、自然と人工の境界は存在しないということ、そのために欧米では科学的に分析して真理に近づくと捉える一方、日本では無常

観、つまり流れゆく時間とともに人間の英知が生まれるとされる文化差があるとのことです。日本社会がデジタル化でよい方向に向かうためには、こうした文化であることを認識しなければならないと強調されました。

ベルク氏は論文「俳句における言葉の露点と景色」において、次のように述べています。

一般的に日本語、特に俳句は、私が呼ぶ「言葉の露点」—いわゆる気象学の露点—をフランス語のような言葉よりも、より上流へ位置づける傾向にあることが明らかである。(中略) 比較的、より雰囲気、風景、または風土によって構成される。別の言い方をすると、言語化の度合いが少ないと言える。

また、日本語での話し言葉では欧米語と異なり、主語 0 (ゼロ) つまり主語がない文章が多用される対話が成り立つとベルク氏は指摘します。例えば、対話が続く中でいちいち主語は誰かということをはっきりさせようとすると、元々の人間関係によりますが、無粋とか無遠慮とかいった望ましくない感情を相手に抱かせる懸念があるだろうと想像できます。

ベルク氏は、日本語の露点が高いままであるからこそ、俳句などを始めとする日本独特の優れた文化が成り立ってきたとも述べています。このことに、日本に住む私たちが気づいて、文化に合ったコミュニケーションの取り方、そして社会の在り方について考える必要があります。

情報システムの理論や方法論のほとんどは米国由来のものです。一般的に米国の文化では個人が自立していることが、周囲に合わせることもより優先されます。文化的慣習から、日本でよくある企業が情報システムを SI ベンダーに丸投げするといったやり方はしません。米国の SI ベンダーとは、情報システムのユーザあるいは IT 部門が定めた要求要件に基づきプロジェクトスコープを定めることが一般的です。

日本では IS 技術者の多くは顧客企業の文化に溶け込みながら、顧客企業やユーザの立場で最適解を求められます。その際、顧客企業の文化や慣習などの暗黙知が、プロジェクトにおいて判断基準の肝となることがあります。この暗黙知は長年企業文化に根差したもので言葉の露点が高いままであり、新参者が言語化することは困難です。そして、情報システムの設計・開発に進むと、今度は米国生まれの手法に従う必要があります。ここでは「言葉の露点」は非常に低い状態です。開発が進んだ段階で、顧客企業の要望により想定外の仕様変更があった場合に、言葉の露点は差が大きく開いたままです。顧客企業にとっては当然の知見であると見なされると、IS 技術者の見落としであるとされて仕様変更ではなく開発側の「バグ」とカウントされることさえあるかもしれません。

こうした文化差、言語上の困難にどのように立ち向かうかが重要です。文化差があることを理解しつつ、プロジェクトチーム全体の力を高めることが必要です。顧客の文化に溶け込

みつつ、プロジェクトのマネジメントおよびエンジニアリングの能力を高めることと同時に、心理的な側面でプロジェクト全体を支えることが求められます。

心理的支援として考えられるのは、例えば欧米で開発された心理的資本の考え方—Hope（ホープ）、Efficacy（自己効力感）、Resilience（レジリエンス）、Optimism（楽観性）—に加えて、日本らしい強みとなる「一体感」という要素を強化することです。「一体感」とはプロジェクトで問題が生じた際に、皆で協力して解決しようとする連帯感を差します。情報システムのプロジェクトではトラブルがつきもので、トラブルが続くとプロジェクトチーム内には「ダメ出し」が多くなります。そんなときでも、プロジェクトのスコープ実現に向かって一緒に努力しようというチームの支えのおかげでチームメンバーが力を発揮できます。「成功の神様は一緒にいる。そしてみんなの努力を見てくれている」といったメッセージが心の中に定着していると、苦しくても頑張りを続ける原動力となっていきます。

テレワークでの働き方が浸透する中、このような職場の一体感の醸成が何より必要であると感ずります。この一体感の醸成に有効なツールがパターンランゲージです。これからの研究会活動の1つとして、「理想の実現パターン」の活用に注力していきたいと考えます。

今回の公開研究会の参加にあたり、改めてベルク氏の「俳句における言葉の露点と景色」を読みました。そして、芳賀さんとの30年以上に亘る関わりについて思いをはせました。芳賀さんが私に教えて下さったこと、わかりやすく伝えようとした時のエピソードを思い返すと、全て優しい何かに包まれていたと感じました。社会にとっての問題解決の道、そして私にとって臨床心理士として取り組む道につながって行きました。

今回、基礎情報学の提唱者である西垣先生の新刊に「言葉の露点」の論考が取り上げられたことは、芳賀さんが先見性を持って「言葉の露点」には重要な意味があると捉えたこと、そして意義について広げた考え方により情報システムにおける概念化を図ったこと、更なる他の分野にも応用できるとして社会の多くの問題解決を図った成果であると確信します。改めて、芳賀さんに哀悼と共に敬意と感謝の意を表したいと思います。

<参考・引用>

*1) 超デジタル世界: DX,メタバースのゆくえ 西垣通 (2023) . 岩波書店

*2) Augustin Berque “Point de parole et paysage dans le haiku”, Revue des sciences humaines, No.282, Feb. 2006, 29-40 (オーギュスタン・ベルク「俳句における言葉の露点と景色」)

<https://www.issj.net/mm/mm16/11/mm1611-ab-ab.pdf>

*3) 新情報システム学体系調査研究委員会編, 新情報システム学序説, 一般社団法人情報システム学会, 2014